

各都道府県および市町村の教育委員会関係者
小中高等学校の英語科先生 対象

『賢明学院小学校の
取組(授業デザイン)と評価(テスト)について』
～ ETS※1が委託を受け、
MEXCBT(メクビット)※2に掲載された
CEFR A2未満からB2後半までの4技能CBT問題の活用～

※1 ETS (Educational Testing Service) ...TOEFL iBT®、TOEFL Primary®/Junior®、TOEIC®等の
外部検定試験を作成しているアメリカのテスト機関

※2 MEXCBT(メクビット) = 文部科学省CBTシステム (eポータルで活用可能)



『文部科学省CBTシステム
(MEXCBT:メクビット)について』

の詳細は文部科学省のホームページを
ご参照ください。

下記、QRコード、または、
リンクからアクセスして下さい。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/mext_00001.html



賢明学院

英語科主任 中村 直紀

文部科学省英語教育強化事業AI英語活用リーダー

元ECC外語学院近畿・関東管区長〈部長職〉

一般社団法人国際教育英語試験協会 公認TOEFL Primary®/Junior®アドバイザー



目次

1. はじめに～英語運用能力を伸ばす指導の重要性～	p.2
2. 現状の取組(授業デザイン)	p.3
2.1 指導法(小学校高学年)	p.3
2.2 テキストの選定	p.4
2.3 その他の取組	p.5
2.3.1 レベル差に向けて	p.5
2.3.2 Reading力アップ～Lexile®(レクサイル)指数の活用～	p.5
2.3.3 Speaking力アップ	p.6
2.3.4 英検Writing対策	p.6
2.3.5 Native 教員との連携	p.7
2.3.6文部科学省や様々な教育機関との研究	p.7
3. 文部科学省が改善を求める取組(授業デザイン)との比較	p.8
4. 取組(授業デザイン)を考慮した評価(テスト)	p.8
4.1 取組(授業デザイン)の現状把握と目標設定	p.8
4.1.1 主体的に学習に取り組む態度	p.8
4.1.2 思考・判断・表現	p.9
4.1.3 知識・技能～到達度は英検で、熟達度はTOEFL Primary®で確認～	p.10
4.1.4 学校ホームページやパンフレットに掲載している 外部テストの分析内容	p.11
4.2 MEXCBT(メクビット)に搭載されたCEFR A2未満からB2後半 までの4技能CBT問題の活用	p.13
5. おわりに～大切にしている3つの観点と考え方～	p.16

※MEXCBT(メクビット)=文部科学省CBTシステム(eポータルで活用可能)

※CBT(Computer Based Testing)=コンピュータ上で実施される試験

1. はじめに～英語運用能力を伸ばす指導の重要性～

2020年度より文部科学省からの指針である「グローバル化に対応した英語教育改革」、「学習指導要領の改訂」が始まり、大学入学共通テストではセンター試験で問われてきた英語力とは全く異なった「英語での思考力・判断力」を測るようになり、「どれだけ覚えたか(到達度)」から「英語をどれだけ運用できるか、どれだけの実践力があるのか(熟達度)」が問われるようになった。「(日本の同世代と比べた)到達度(学習指導要領に沿った学習定着度)」と「(世界の同世代と比べた)熟達度(英語運用能力)」の両面を意識した指導方法の重要度を感じている。また、コロナ禍でICTの活用が急速に早まり、諸外国へ行かなくても現地のTutor(チューター)と身近で実践的な練習ができるようになってきており、今後このグローバル社会で「生き抜く力」を付けていくための様々な方法が実践されてきている。



現在、私が指導している賢明学院小学校では、到達度は実用英語技能検定(希望者受験)で測り、熟達度は世界中の同世代の子ども達が受験しているTOEFL Primary®/Junior®(全員受験)で測っている。

その際、今後のグローバル社会で活躍していく人材を育成していくための英語教育は必要不可欠であり、熟達度(英語運用能力)の向上は必ず特徴の一つとして展開していかなければならない。それは文部科学省からの指標にも明確に打ち出されており、その取組(授業デザイン)ができているかどうかを確認する必要がある。

そこで今回は私が教えている小学校高学年を中心にどのような英語教育をどのような環境、指標で展開しているのかを述べさせていただきます、それが今後の教育活動の参考になれば幸いです。



※授業見学風景
「ぜひ、授業見学にお越しいただけましたら幸いです。」

2. 現状の取組（授業デザイン）

2.1 指導法(小学校高学年)

“学ぶ楽しさや、分かる喜びを実感し、将来に役立つ英語運用能力(コミュニケーション能力)育成と中学校に向けての4技能の土台作り”を目標に指導を進めている。毎回の進め方はパターン化されており、究極は教師がいなくても子ども達だけでOutputの練習ができるようになっている。

Input : Output = 2 : 8、子ども達の発話量 : 教師の発話量 = 8 : 2、教師の授業内での英語使用量 : 日本語使用量 = 8 : 2で進めている。Inputでは、それぞれのUnitに出てくるターゲットとなる単語、文法を説明し、これらの単語や文法をどのように会話の中で使っていくのかをOutputで実践していく。簡潔に表すとOutputにおいての指導は、

Listening → Understanding →

Reading Practice → Check →

Memorization → Check →

Writing → Reading Practice → Check →

Memorization → Check (Skit) →

Workbook (Writing)

という順に行っていく。

この流れをChorus Reading、Self-Practice、Pair Practiceを融合させながら練習し、最終的に習った単語や文法を用いて、様々な場面、状況に合わせた自分達の会話を発表する。

ただし、この取組(授業デザイン)のベースにあるものは「子ども達が間違ってもよいので積極的に参加できる(発言できる)環境」である。この環境を作っていくには、とにかく「慣れ」と「実践」しかないので、指示語などは最初聞き取れない子ども達もいるが、あえて日本語で説明することはせず何回も同じ指示を与えていけば自然と理解できるようになる。また、実践の中でやったことに関して「Great!」、「Good job!」や「OK!」といったPositiveな声掛けをしていくことで自信が芽生え前向きに参加するようになり、次の課題へ取り組むようになる。このような循環を作り上げていくことを何よりも大切にしている。



※英語授業風景

2.2 テキストの選定

教材は、小学校1年生～3年生はOxford University Pressの「Everybody Up 1～3」とAAS Pressの「Awesome Phonics Adventure 1～3」、4年生は「Everybody Up 4」、5年生はOxford University Pressの「Get Ahead 1」、6年生は「Get Ahead 1」とアルクの「キクタン」を使用している。

1～3年生までは文字と音をリンクさせながら正しい発音を習得し、そこから表現を学び、Projectを通じてプレゼン能力を付けていくという流れで指導し、4年生以上は3年生までの流れを更に応用し、概念的な学習を入れていくことで、文の構造を理解し、Listening/Speakingだけでなく、よりアカデミックな内容に関してもReading/Writing

ができるよう指導を進めている。特にOxford University Pressの教材は長年使用しているが、全世界で使われている教材なので第二言語としての習得がしやすく、メイン教材のe-bookだけでなく、その他のオンラインツールも充実しており、家庭学習にも繋げやすくなっている。毎年、教材の選定やその他のツールの使用法などをアップデートする機会もあり、課題発見→授業改善に役立てることができている。また、Teacher's Manualが非常に細かく作成されているため、複数の教師が教えていることによるクオリティの差が出ないように活用することができる。

(教材例－小学校6年生 Oxford大学出版社「Get Ahead1 Unit11」より)

Kento	Where are you going to go on vacation?
Mika	I'm going to visit my aunt in Kuala Lumpur.
Kento	Oh, I'd love to go there! What are you going to see?
Mika	Well, I really want to see the National Museum and the Petronas Towers.
Kento	That sounds amazing! How long are you going to stay?
Mika	Two weeks. I can't wait!
Kento	Well, don't forget your camera!

ここでのGrammar Pointは「be going to～」を使って未来の予定を学習する。Outputの指導の流れは前述の通りだが、最終的には青字の部分をも自分たちの言葉に変えて作成し、覚えたものをプレゼンするという流れになっている。当然、OutputするためにはInputが必要であり、そのバランスを重視している。



※Oxford大学出版社「Get Ahead1」

2.3 その他の取組

2.3.1 レベル差に向けて

近年、インターナショナルスクールからの入学者の割合も増えているので、確かにCommunicativeな授業の展開はしやすくなってはいるが、当然小学校に入って初めて英語学習を始めた子ども達もいるので、どこに合わせて授業を進めていくのかは難しい課題である。これは中学1年生を教えている先生方も特にこの近年感じている部分だとは思いますが、まずは「英語が好き」かどうかという指標を持ち、その上で授業展開を考えていくべきだと思う。

最初は聞くことに慣れていない子ども達

も徐々に慣れてくるので、思い切って英語の使用量を増やしていくことは大切である。また、どのレベルに合わせながら授業を行うのかはそのトピックやプラクティスの内容に応じて変えてはいくが、基本的には上のレベルに合わせて行っている。ただし、その際にはペアリングの工夫をして、理解している子ども達がリードしていくという形にしている。そして、常に間違っても良いという雰囲気を作ることにより、誰もが積極的に挙手し、答えることのできる環境づくりを重視している。

2.3.2 Reading力アップ～Lexile® (レクサイル) 指数の活用～

図書館内に英語コーナーを設け、TOEFL Primary®/Junior®の全員受験(3～6年生)によって測られるLexile®(レクサイル)指数に応じてレベル分けがされているスカラスティック社のオーセンティックリーダー※1「Lexile® Collection(レクサイル・コレクション)」を揃えており、自分のレベルに合わせた本を読むことでReading力の強化を

している。また、マグロヒルエデュケーション社のレベルド・リーダー※2「SRA(Science Research Associates/サイエンス・リサーチ・アソシエイツ)Reading Laboratory®(リーディング・ラボラトリー)」を用いることでよりアクティブなReadingの実践ができる体制を整えている。



※スカラスティック社「Lexile® Collection」



※マグロヒルエデュケーション社「SRA Reading Laboratory®」

オーセンティックリーダー※1について

『TOEFL Primary® / TOEFL Junior®と、オーセンティック・リーダーレベルド・リーダーの親和性』

レベルド・リーダー※2について

『推奨プログラムを通じて、学習者の読解力を向上させ、TOEFL Primary®/TOEFL Junior®テストで良い結果を目指すには』



2.3.3 Speaking力アップ

授業では、Input→Outputを繰り返し実践していくので、子ども達は場面状況に応じた実践的な表現をたくさん覚えていくが、やはり即答できるかどうかというサバイバル的な状況は必要だと考えている。ホームステイや留学をするとそれが一番体感できるが、それ以外にも様々な国のTutorと実践的な会話を学習できるDMM英会話を希望者が受講できる環境を整えている。Tutorの国籍数は122ヶ国にも及び、様々な国のTutorが話す英語、そしてその国の文化や情報も

学ぶことができるので、更なる英語学習のモチベーションに繋がっている。

私自身も自己研鑽として定期的に英語資格試験を受け、毎日DMM英会話を受講している。今までに60ヶ国以上のTutorと話したが、それぞれの異なった発音やアクセント、文化の違いを学ぶことができ探求心が広がってくる。やはり教師も一緒に学んでいるという姿を子ども達には見せていきたいと感じている。



※DMM英会話受講風景

2.3.4 英検Writing対策

「到達度」を測るために英検を活用しているが、英検は事前対策をするかしないかで合否が大きく変わってくるので、年3回の実施前にはWritingパートのテンプレートを覚えさせ、対応できるようにしている。TOEFL Primary®/Junior® Writingは、どこ

まで英語を使えるようになったのかという「熟達度(英語運用能力)」を測っているので特に対策はしていないが、到達度を図る英検に関してはこの指導(対策)は大切である。

2.3.5 Native教員との連携

現在私のいる学院には4名のNative教員が勤務しているが、「様々な国の人話す英語に慣れる」とことと「様々な国の文化に触れる」ということを重要視しているため、アメリカ、カナダ、スリランカ、フィリピン

といった様々な国籍の教員が勤務している。(それ以外にもイギリス、オーストラリア、インド、香港出身の先生が勤務していた。)

授業はもちろんであるが、他の先生方

と全く同じように副担任として子ども達と接しているため、日常生活を共に過ごすという環境が整っており、子ども達にとっては英語を生活圏の中で身近に感じることができている。特に私立の学校であれば

2.3.6 文部科学省や様々な教育機関との研究

客観的に授業を見ていくため、文部科学省や様々な学校、大学、教育機関と連携して研究を進めている。

大学と連携し、COLT(Communicative Orientation of Language Teaching) Observation Schemeを用いて成果を測っている。これを使用することでECC時代の研修と同じように発話量や英語使用量などを測り、それがもたらす子ども達の実戦力がどのように上がっているのかを検証している。

2025年4月から、AIを活用した英語教育の普及を図る文部科学省の「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業(AIの活用による英語教育強化事業)」のモデル校にも指定され、AIを搭載したECCの学習支援アプリ「ECC Study Assist」を活用する。

それ以外にも、熟達度(英語運用能力)を

Nativeの教員がいるのが普通であると思うが、やはり我々と同じように日本人の子ども達の特性を理解し、どのような業務が求められているのかを明確にすることで業務への参画度は変わってくる。

測定するTOEFL Primary®/Junior®のスピーキング・ライティングテストの活用方法を現場英語科の教員が勉強する機会として、英語科教員会員制(英語教員限定)の『TOEFL Primary®/Junior®英語教員研究会』を2025年6月に設立。研究会は、会員先生方によるTOEFL Primary®スピーキング・ライティングテストの体験受験や勉強会を実施していく。設立者兼代表としての思いは、熟達度(英語運用能力)を伸ばす取組(授業デザイン)とその効果測定の評価(テスト)を使える先生が日本で増える事が、英語運用能力を伸ばす児童・生徒が増える事に繋がると考えている。今後子ども達にとって必要となる英語の四技能をどのように測っていくべきなのかを大切な研究テーマとして進めていきたいと思う。



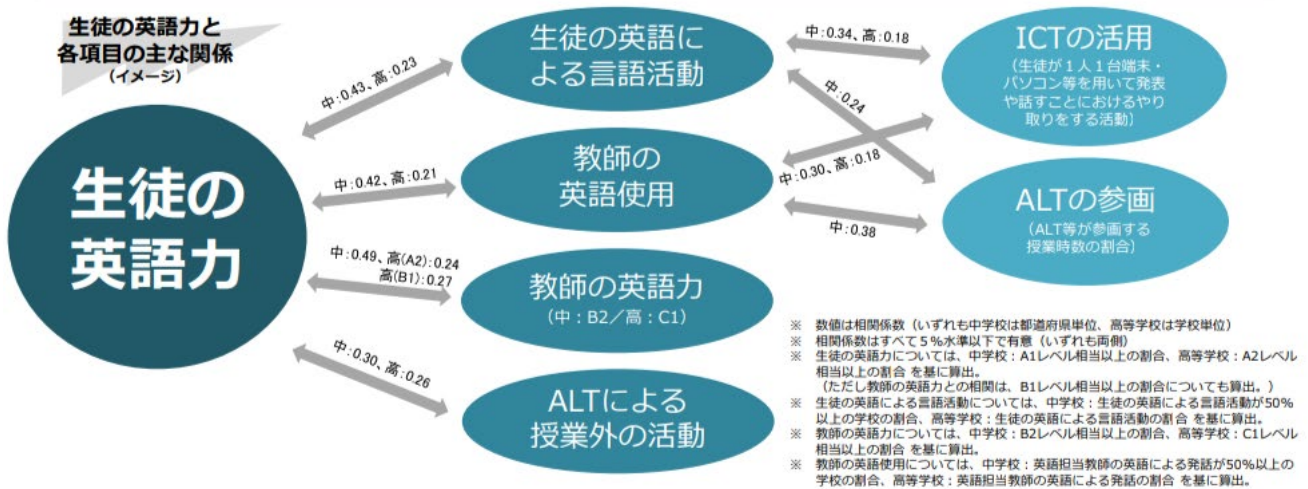
※ECCの学習支援アプリ「ECC Study Assist」活用風景



※TOEFL Primary®スピーキング・ライティングテスト風景

3. 文部科学省が改善を求める取組（授業デザイン）との比較

『令和5年度「英語教育実施状況調査」の結果を踏まえた生徒の英語力向上に向けた取組の推進等について（通知）P4』より



上記は文部科学省が、「生徒の英語力向上に関する取組」として掲げているものであるが、この内容を現在進めている取組(授業デザイン)の内容と比較してみると全てが当てはまっていた。実際に日々作ってきたものが文部科学省の掲げている6つの項目(①生徒の英語による言語活用、②教師の英語使用、③教師の英語力、④ALTによる授業外の活動、⑤ICTの活用、⑥ALTの参画)と全て一致しているので、今後もICTを効果的に使い、Outputと英語使用の割合を8割

で進め、様々な国の先生方と共に教育を展開していきたいと思う。また、教員自身のアップデートも不可欠で、資格試験の受験や英語力を更に上げていくという努力を子ども達と共に続けていかなければならないと感じる。なぜなら自ら学ばなければ子ども達に今求められる英語教育を提供できないし、その学びを子ども達に還元していくことが教師としてとても大切であると感じるからである。

4. 取組（授業デザイン）を考慮した評価（テスト）

4.1 評価授業デザインの現状把握と目標設定

4.1.1 主体的に学習に取り組む態度

特に小学校における主体的評価は教師側からのアプローチで大きく変わると考える。中には英語学習に関して苦手意識を持った子ども達も当然いるが、前述の通り「間違ってもよいので積極的に参加できる授業」をこちらから積極的に展開していけばこの評価は自ずと高くなる。

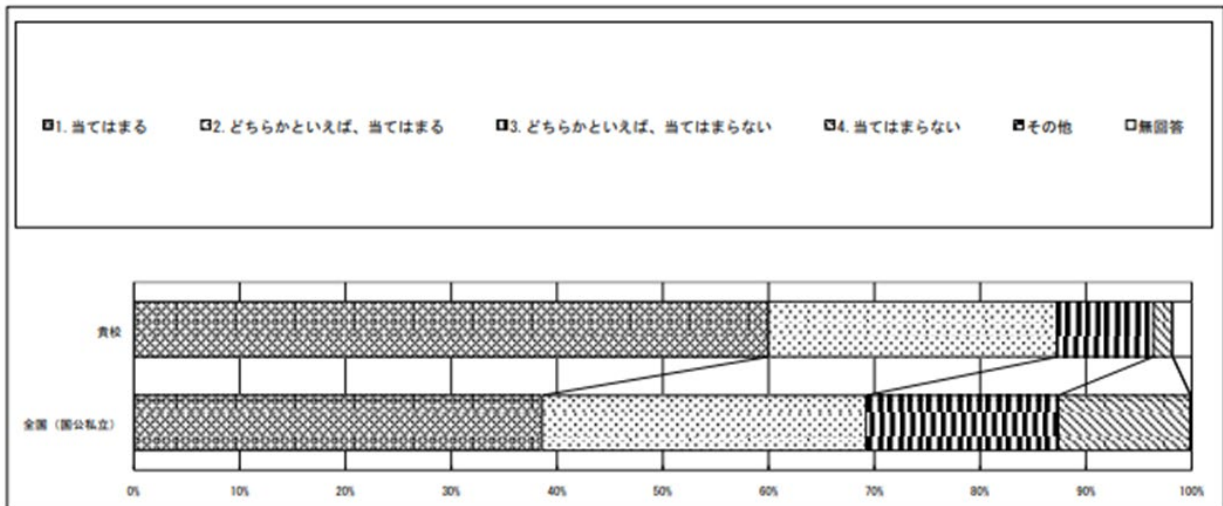
最終的に「その教科を好きかどうかという」ことで測ることが一番シンプルで分かりやすいし、全国学力・学習調査アンケート結果を大切にし、毎学期の授業の振り返りでは、<授業を振り返っての感想>、<自分で伸びたと感じること>、<先生へのメッセージ>を自由に記入させており、お互いの

の確認事項としてフィードバックを大切に
し、今後の学習へのアドバイスや次学期へ
の課題などを明確にして、次のステップへ

進むようにしている。結局はこの主体的評価
は教師の授業力の評価であると言える。

(令和5年度全国学力・学習調査アンケート結果)

質問番号	質問事項										
(55)	英語の勉強は好きですか										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	無回答
貴校	60.0	27.3	9.1	1.8						0.0	1.8
全国(国公立)	38.6	30.6	18.2	12.5						0.0	0.1



「英語が好きかどうか」を客観的に見る
ことを大切にしており、特にアンケート結
果等は自分の授業を反映しているので、子
ども達がどのように感じているのかは注意
して見ている。今の所は毎年約90%の児童
が「好き」と答えているので良い展開はで
きていると思う。ただ、授業パターンは毎
回同じにしているのでは徐々にやり方も覚え
てくるし、何よりもできた時の自信が今後

の学習に繋がってくる。

やはり従来の減点方式でなく、加点方式で評
価をすることは子ども達のモチベーションに
繋がるし、自主性も芽生える。その際の留意点
はどのようなポイントでこちらが評価してい
るのかを明確にすることであり、授業デザインと
直結していることを理解させることでより一層
の効果が生まれる。

4.1.2 思考・判断・表現

この部分に関しては、Outputを重要視し、
従来の減点方式でストレスを与えながら評
価するやり方ではなく、自分は何がどこま
でできるようになったのかを把握させ、
Unitごとに加点して評価するようにしている。

前述の通りOutputはテキストにあるダイ
アログを基本にして、最終的には場面や状
況に合わせた自分達の対話を全員の前で発
表するというを目的としているが、それ
までのPracticeの中で、ダイアログを読む

→覚える→作り変える→読む→発表するという流れを「きちんとした発音、アクセントではっきりと自然に話すことができるか」どうかの指標でスコア化している。

これをUnitごとに2回行い、それぞれペアも変えて行うので「お互いに協力し、高め

合う」という観点からも成果を測ることができている。この評価に関しては、もちろん英語が苦手な子どももいるし、自己表現が苦手な子どももいるので、内容に応じて教師や周囲からの手助けもいるし、嫌にならないように注意しなければならない。

4.1.3 知識・技能(到達度は英検で確認、熟達度はTOEFL Primary®で確認)

この部分に関しては、特に小学校における英語能力は個々の子ども達のバックグラウンドや生活環境によって変わってくるので、慎重に評価をしている。そして、最も自分の授業内容、方法が反映される部分だと感じる。そのため、英語資格試験の活用が必要不可欠であり、国際基準であるCEFRを基準として成果を測っている。

大学入試が最終のゴールではなく、グローバル化している世の中で子ども達が活躍するための基盤を作っていくことが英語教師の使命であると考えている。そのため、様々な英語資格試験に携わり、自ら受験してきた経験から、子ども達の英語能力を「到達度」という観点と「熟達度」という観点から評価する必要性を感じている。現在、学習指導要領に沿ってどれだけ覚えたかという「到達度」は、日本においては受験等では必要不可欠な実用英語技能検定(希望者受験)で測り、「熟達度」は世界中の同世代の子ども達が受験しているTOEFL Primary®/Junior®(全員受験)で測っている。以前に双方の違いに関してはレポートで述べさせていただいたので割愛するが、TOEFL Primary®/Junior®は、実生活で求められる、必要な情報のみを読み取る力、思考力・判断力、場面や目的に応じた聞き取りを要する実践的な英語運用能力を測ることができるので、私自身の授業の在り方を評価(テスト)する指標としても活用

することができると感じている。

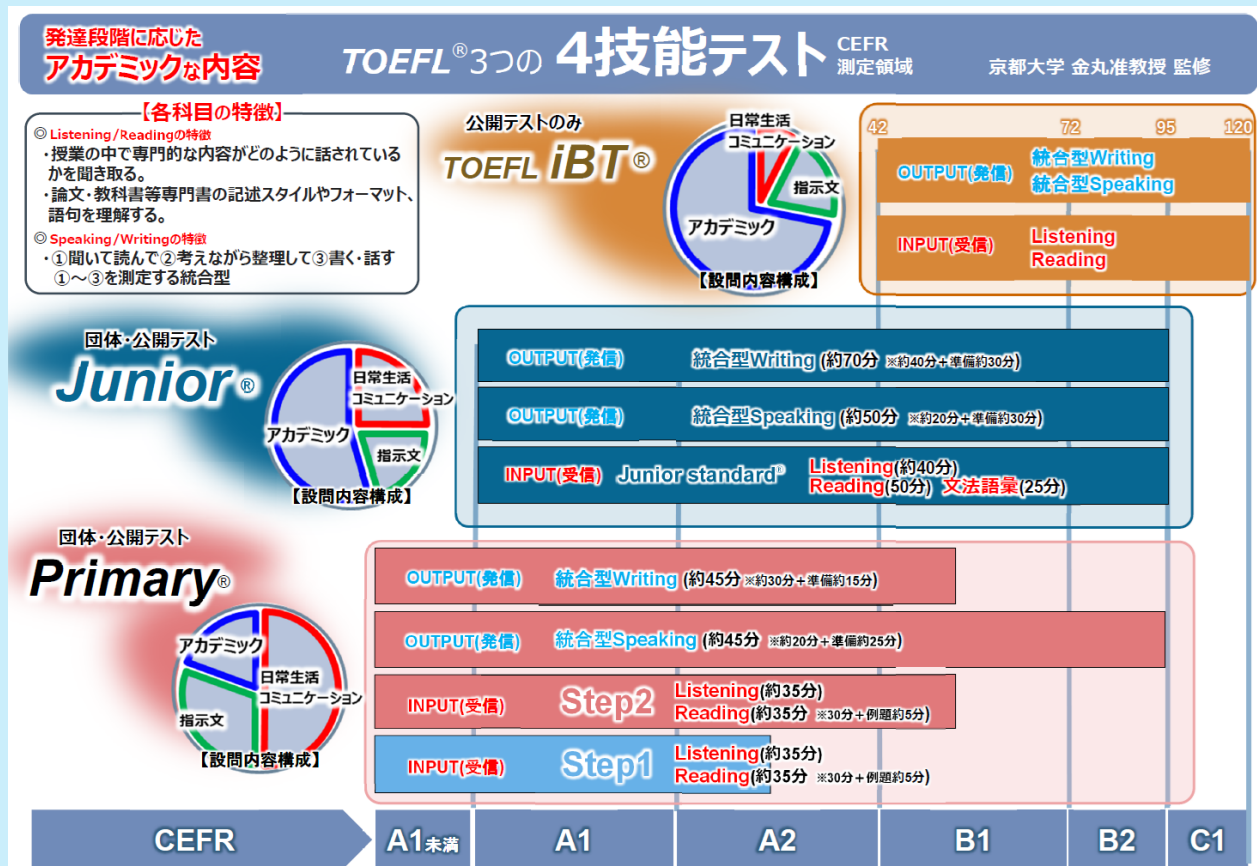
特にTOEFL Primary®/Junior®は合否ではなく「英語をどれだけ運用できるか(英語運用能力)」を世界基準で測るためのテストなので、現在自身が世界中の同世代の子ども達と比べてどのようなレベルなのかを理解することで非常にモチベーションが上がる。今まで英語嫌いになった子ども達もたくさん見てきたが、確かに授業が面白くないという理由が一番ではあるが、保護者からの過度な期待によってやる気が下がってしまうということも大きな原因である。例えば、英検3級に合格した後、十分な能力が付いていないのに次は準2級を受験させ、不合格になり…これを数回繰り返せばやる気なくなるのも当然である。ここは教師側から英検バンドスコア(自分の英検CSEスコアが、合格基準スコアとどのくらい離れているかを示す指標)がせめて-5くらい(合格点まであと126~150点必要)になったら受けさせるようにアドバイスすべきである。一方、TOEFL Primary®/Junior®は合否ではなく、自身の熟達度を測り、どこが伸びたのか、次に向けてはどんな取組(授業デザイン)が必要なのかを客観的に見ていくことができることに加え、加点方式で使えるため、モチベーションを向上のためのテストとして有効だと言える。

この2つのテストは、私自身がすべての英語資格試験を受けてみて採用したものであ

るが、実際にTOEFL Primary®/Junior®を体験受験した上で、導入した理由を列挙する。

《TOEFL Primary®導入理由》

- ・子ども達が普段日常生活で経験している場面設定になっており、非常にリアルなイメージがしやすい内容になっている。(私自身が留学していた時を思い出すような場面設定であった。)
- ・世界中の同年代の子ども達と比較して、コミュニケーション実践能力がどれだけ付いてきたのか、「熟達度」を測ることができる。
- ・学年ごとに同レベルのテストを受験する必要はなく、個々のレベル(3レベル展開)に合わせて幅広いCEFRのレンジで測ることができる。
- ・聞き取りは一回なので、日常レベルからアカデミックな内容の必要な情報のみを聞き取るという習慣を早い段階から意識づけでき、先々に必要となる能力を測ることができる。(共通テストへの準備の初歩段階として使える。)
- ・合否がないので、自分の伸びたところや課題点を把握でき、英語学習に対してのモチベーションが上がる。(TOEFL®は入試のためのテストではない。)
- ・「できる」「できない」ではなく、今後必要とされるコミュニケーションスキルを体感できる。



(株)ダンケゼア作成商品・サービスプレゼン用非公認校内限定資料

4.1.4 学校ホームページやパンフレットに掲載している外部テストの分析内容

英検に関しては、準会場として5級から3級までを受験できるように設定し、年3回受験する機会を設けており、各レベルに到達

した時点で受験できるように希望者対象で受験している。一方、グローバルな指標で測ることのできるTOEFL Primary®/Junior®

では、毎年Below A1を減らすことを目標としており、卒業時には90%以上の児童がA1レベル以上で卒業していくので、Outputを

中心とした授業の指標として全員が受験し、正確な結果が出ている。

★「到達度」(希望者受験)と「熟達度」(全員受験)の結果(一例)

・英検取得の現状に関して(高学年の級ごと取得者数)

<2023/2/27 付>

取得級 \ 学年	5 級	4 級	3 級	準 2 級	2 級	準 1 級
5 年 (55 名)	12 名	13 名	13 名	8 名	2 名	
6 年 (64 名)	11 名	13 名	12 名	13 名	5 名	1 名

※英検はあくまでも合否で見ているので人数で示している。

・TOEFL の GEFR 割合に関して(2022 年度と 2023 年度の比較)

<2022 年度>5 年(受験者 53 名)

part \ level	below A1	A1	A2	B1
Reading	9%	60%	31%	
Listening	9%	41%	46%	4%

↓ ↓ 1 年で below A1 の割合が減り 90%の児童が A1 Level 以上で卒業

<2023 年度>6 年(受験者 54 名)

part \ level	below A1	A1	A2	B1
Reading	2%	59%	35%	4%
Listening	2%	46%	46%	6%



世界の小学生・中学生の成績優秀者への賞状授与

Listening/Reading	Speaking	Writing
226点以上(Step2)の成績優秀者に賞状(上図)が授与されます。 ※ListeningスコアReadingスコア共に113点以上であること。	23点以上の成績優秀者に賞状(上図)が授与されます。	16点以上の成績優秀者に賞状(上図)が授与されます。

(株)ダンケゼア作成商品・サービスプレゼン用非公認校内限定資料

※TOEFL Primary®テスト優秀者に賞状授与

4.2. MEXCBTに搭載されたCEFR A2未満からB2後半までの4技能CBT問題の活用

現在、eポータルはコニカミノルタ社の「tomoLinks」を使用しているが、その中にある文部科学省のCBTシステム「MEXCBT:メクビット」を適宜授業内で或いは課題として活用している。MEXCBTには様々な教科の問題が掲載されているが、外国語に関しては「MEXT英語」を選択している。英語の4技能(Reading、Listening、Writing、Speaking)をCEFR A1未満～B2後半レベルの範囲で測ることができ、それぞれの問題に対してのワンポイント解説があるので、個々の能力に応じて問題を進めて

いくことができるようになっており、活用価値が高い。

これらはETSが委託を受け掲載された4技能CBT問題であり100問掲載されている。問題はTOEFL Primary®/Junior®に準じており、実際の授業の指標と一致しているので、今後もこれらの効果的な活用実証は続けていきたいと思う。また、今まではTOEFL Primary®/Junior®の実施前オリエンテーションではPractice Testを実施していたが、MEXCBTを活用することで日々の授業実践の確認をすることが可能になっている。

MEXCBTを活用した 英語「話すこと」「書くこと」の力の強化

別添2

目的

- ◎ 英語4技能をバランスよく育成するために、特に課題となっている「話すこと」「書くこと」の力の強化に向けて、CBT問題を活用して、児童生徒の個別最適な学びや教師の指導の充実に支援。
 - ・ **MEXCBT（文部科学省CBTシステム）**に、「話すこと」「書くこと」を中心としたCBT問題を搭載。
 - ・ 各CBT問題を、国際標準である**CEFR（※1）レベルと紐づけ（※2）**。
 - （※1）ヨーロッパ言語共通参照枠。第4期教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）において、中学校卒業段階でCEFR A1レベル相当以上、高等学校卒業段階でCEFR A2レベル相当以上を達成した中高生の割合を6割以上にするなどを目指す。
 - （※2）外部検定試験のように、CEFRレベルを認定するものではない。

搭載するCBT問題

- ETS（※）に委託し、「話すこと」「書くこと」を中心としたCBT問題を**100問（CEFR A1未満～B2レベル相当）**搭載。（問題や解答・解説イメージは別添参照）
 - （※）ETS Japan 合同会社。TOEFL®、TOEIC®等の外部検定試験を作成している米国ETSの日本法人。
- その他、全国学力・学習状況調査の過去の調査問題や、英語教育関係団体（※）作成の問題も併せて搭載。
 - （※）ブリティッシュ・カウンシル、日本英語検定協会 協力

活用のメリット

- ① 児童生徒の学習状況に応じた**個別最適な学び**を通じて、「話すこと」「書くこと」の力の強化
 - ・ 児童生徒の学習状況に応じて、教師が適切なCBT問題を選択し、家庭学習の課題として活用 など
- ② 教師による、児童生徒の**英語力のより客観的な把握**をサポート
 - ・ 「話すこと」「書くこと」の**パフォーマンステストとして活用**
 - ・ 定期テスト等の題材として活用 など
- ③ **多彩なテーマや題材を用いた授業づくり**をサポート
 - ・ 日常的な話題から社会的な話題まで、幅広いテーマや題材を扱ったCBT問題の中から、教師が自由に選択し、授業中に活用 など

今後の予定

- MEXCBTにCBT問題を**5月9日**に公開予定。（随時、追加予定）
- 本取組やその具体的な活用方法について、全国の教育委員会や学校に対して、周知予定。

MEXCBTに搭載されるCBT問題のイメージ

別添

特徴

問題 教師は、技能やCEFRレベル (CEFR A1未満~B2レベル相当) ごとに問題の選択が可能。

問題 多彩なテーマや題材から問題の選択が可能。

題材例：自分の好きなもの、身の回りの物事、自然科学、歴史 など

解答・解説 解答内容に応じてCEFRレベルの把握が可能。

解答・解説 学習のアドバイスを参考に、学習に役立てることが可能。

「話すこと」問題 (画面イメージ)



録音は2回まで可能

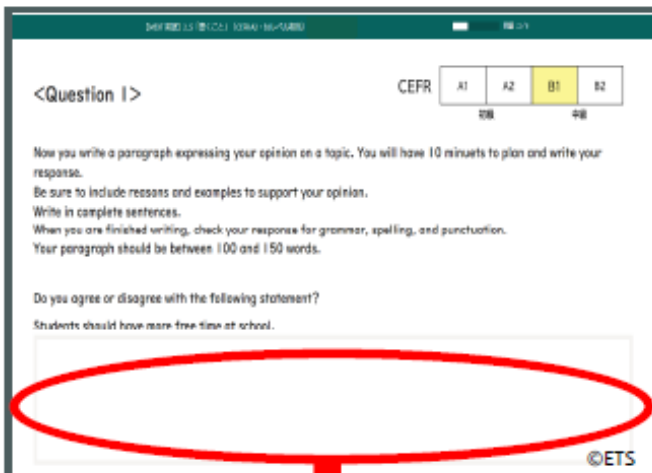
自分の解答音声を再生して聞くことが可能

「話すこと」解答・解説 (画面イメージ)



英語を学習している、世界の子供たちの解答例を音声で聞くことが可能

「書くこと」問題 (画面イメージ)



キーボード入力をして解答することが可能

「書くこと」解答・解説 (画面イメージ)



学習のアドバイスを参考に、学習に役立てることが可能

5. おわりに～大切にしている3つの観点と考え方～

今回は現在進めている英語教育のデザインとその指標、成果についてまとめたが、たくさんの人々と協力して作り上げている。日本全体の英語力は諸外国と比較するとまだまだ低い、この英語力というのは「英語を使えるかどうか」という指標なので、今後我々が指導法を変えていくことで大きく結果が左右していくと推測できる。

そして文部科学省の掲げる取組から進めていくべき英語教育は見て取れるが、それを現場で実践できているかを再度見直していく必要がある。それは公立私立関係なく、教えている子ども達の将来に役立つ英語教育でなければならない。現在行っている

英語教育が成功なのか失敗なのかを問う必要はないが、アップデートはしていくべきである。

再度、私が大切にしているポイントとしている指標を整理すると、①子ども達が英語学習を好きかどうか、②どこまで英語を覚えたのかという「到達度」、③どこまで英語を使えるようになったのかという「熟達度」の3つの観点が大切である。そしてその数値に関しては教師が責任を持つべきである。なぜなら「楽しい」だけでなく、子ども達の自信やモチベーションを成果に繋げる必要があるからである。

(2025年度 賢明学院パンフレットより抜粋)



英語教育 4つの技能「聞く・話す・読む・書く」力を伸ばします

★「英語の勉強に興味を持って、簡単な会話を覚えている」と答えた6年生児童が**95%以上!** ※学校評価アンケートより

積極的に自己表現をしよう

「失敗したら恥ずかしい」という気持ちが、英語を話すことへの苦手意識を高めます。本校の英語教育では、話すことへの自信をつけるために、間違いを恐れず積極的に話すことを大事にしています。

将来を見据えた最先端の英語教育

Oxford大学出版社のトレーナーと共に最新のe-book(デジタル教材)を選定して児童の成長段階に合わせたカリキュラムを作成しています。授業実践は、さまざまな英語教育機関にも高く評価されていると同様に、授業研究も続けているため常に最新の学びを展開しています。

授業の様子をご覧ください!



自信が結果につながる! TOEFL Primary/Junior®

1年生の学習を通して得た自分の英語力(熟達度)を知るために、3～6年生全員がTOEFL Primary/Junior®を受験します。(1・2年生は希望制)目標のスコアが取れた時の達成感や自信へとつながり、次園に向けて、さらに高い目標を立てることが出来ます。TOEFL Primary/Junior®テスト実施にあたり、園内で普及活動を行っている公文教育研究会GC&Tと業務連携を継続しています。

TOEFL結果CFERレベル割合(2023年、6年生の結果)



国際標準CFERの目安: ■ B1 英検3級 ■ A2 準2級 ■ A1 英検2級 ■ A1以下

自分のレベルにあった級を受験できる! 実用英語技能検定(英検)



1～6年生の希望者は英検を受験できます。自分のレベルに合った級を受験できるため英語を勉強するモチベーションになると同時に、結果を通して到達度も見えます。また、本校は英検準会場に認められているので、受験者は慣れた環境でリラックスして試験に臨めます(1級～3級)。

合計	準1級	2級	準2級	45人
213人	4人	16人	47人	48人
	3級	4級	5級	

左記は自校のパンフレットより抜粋した英語教育のページであるが、やはり子ども達の成果(自身の授業の成果)を数値として見ていくことは必要である。数値を出していくことで過年度との比較もできるし、そこから課題を見つけ出していくこともできる。特に「熟達度」に関しては、TOEFL Primary®/Junior®の結果において、Below A1(A1以下)をどこまで減らすことができたのかは毎年の大きな課題にしている。そしてほとんどの子ども達がそこをクリアして卒業していくのでモチベーションも上がり、その後も自信を持ってその英語学習に取り組んでいる。

子ども達にできる限りの英語力をつけたいという気持ちはだれでもが持っていると思うが、私が子ども達に接していく上で以下の2つの経験が根底にある。

①アメリカ留学時代の苦労→ある程度は日本で英語を学んでいたので生活に苦労はないと思ったが、当初はルームメイトや先生、クラスメイトの言っていることが全然分からず何回も帰国しようと思った。

②ECC外語学院時代に出会ってきた生徒の皆さん→最初の就職先は株式会社ECCで、そこでの約20年間の勤務の中で英語でのコミュニケーション能力が無くて困っているたくさんの方々に出会ってきた。

このような経験は私が教える子ども達にはしてほしいので、英語教育を「到達度」と「熟達度」という2つの観点から指導していきたいと思っている。今後も英語教育を巡る環境は大きく変わっていくと思うが、その変化に対応すべくどのように指導を進めていくべきなのかを多くの先生方と共有していきたい。子ども達の未来の為に…



著者紹介

中村 直紀

所属: 賢明学院小学校 英語科主任

活動: 「熟達度」と「到達度」を指標としたカリキュラム作成と実践(週約20コマ)

Oxford大学出版局全国セミナー講師

学歴: 関西外国語大学卒業、アリゾナ州立大学留学(Communication学専攻)

経歴: ECC外語学院にて英語講師、学校責任者、エリアマネージャーを経て、近畿・関東管区運営責任者

研究: COLTを用いた専科教員による小学校外国語授業の分析

(北海道教育大学志村昭暢教授・北星学園大学白鳥金吾準教授と共同研究)

その他経歴: 元GTEC英語教育指導アドバイザー、Club & Radio DJ(大阪と京都にて英語で活動)、

2025年度文部科学省「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業(AIの活用による英語教育強化事業)」のAI英語活用リーダーに就任

関連著作レポート

□ 『TOEFL Primary®/Junior®受験前準備 児童受検準備と団体テスト運用準備の観点から』



□ 『到達度テストのGTECから熟達度テストのTOEFL Primary®/Junior®へ変更した理由』



□ 『英検CSEのスコアと TOEFL Primary®/Junior®のスコアは、ノットイコール』



□ 『TOEFL Primary®/TOEFL Junior®の公開テスト体験受験により決めた外部テストの活用方法について』



MEMO

